

【海外学会報告】

2021 年度 第 23 回韓国ケベック学会 参加報告
23^e colloque de l'ACEQ (Association Coréenne d'Études
Québécoises)
Le samedi 20 novembre 2021, visioconférence (Zoom)

2021 年 11 月 20 日、Zoom 会議にて、第 23 回韓国ケベック学会年次コロックが開催された。この度、登壇者として参加する機会を与えてくださった韓国ケベック学会および日本ケベック学会に感謝を申し上げたい。現地にてケベック研究者と直接交流することは叶わなかったが、小倉和子顧問、羽生敦子会員、河野美奈子会員の参加もあり、韓国、カナダ、日本からの研究者がオンライン上で集い、活発な議論が行われる場は知的刺激に満ちたものだった。今年度は、「ケベック州政府ソウル事務所 30 周年：今日のケベック文学」(30^{ième} anniversaire du Bureau du Québec à Séoul : La littérature québécoise d'aujourd'hui) がテーマとして掲げられており、言語、文化、歴史、社会といった人間の営みに関わるものを包含するものとしての文学的事象の面白さを再認識するものだった。

コロックは、HAN Yong Taek 会長による開会の辞の後、ケベック州政府ソウル事務所の Geneviève ROLLAND 氏および在韓国カナダ大使館の Rouslan KATS 氏の、韓国とケベックの交流 30 周年を記念する祝辞とともにじまった。

第 1 部「ケベック州政府ソウル事務所と ACEQ、今と昔」では、まず 1995 年から 1996 年まで代表を務められた Yves GOUGEON 氏が「ケベック州政府ソウル事務所元代表の楽しい韓国の思い出」(Souvenirs agréables de la Corée d'un ancien directeur du Québec à Séoul) と題した発表のなかで、どのように双方の国の関係が、文化面や研究面を通じて発展してきたかを、ご自身の体験談を交えながら振り返られた。次に、1997 年から 2017 年まで代表を務められた YOO Chungyoll 氏のご発表「ケベックとの 30 年」(30 ans avec Québec) では、1991 年の開設以降に展開した主な経済面での活動ならびに代表的な人物の活躍や貢献について時系列的に説明された。そして、2021 年以降代表を

務められている Geneviève ROLLAND 氏は、「韓国、ケベックにとってのアンカー市場として」(Corée du Sud, comme marché d'ancrage pour le Québec) と題した発表のなかで、主な任務内容を総括しつつ、各分野で進行中のプロジェクトや文化活動などを紹介された。

第1部の最後は、HAN Dae Kyun 初代会長によるご発表「ACEQ の創立とケベック研究」(Création et l'ACEQ et Recherches québécoises) により、2004年から現在に至る研究活動の歩みを、これまでの翻訳プロジェクトやコロック、学会誌を取り上げながら追った。故小畑精和先生や故立花英裕先生をはじめ ACEQ の活動に携わった AJEQ 会員の足跡を辿ることができ、感慨深いものだった。

第2部「ケベック文学の今」では、最初に、オタワ大学／ブリティッシュコロンビア大学の Ariane GIBEAU 先生が「現代ケベック女性文学における怒り、暴力そしてデフラグレーションの美学」(Colère, violence et esthétique de la déflagration dans la littérature contemporaine des femmes au Québec) と題した発表を行われた。ケベックの女性文学において、1970年代が家父長社会への反抗や既存の価値観の転倒を目指した時代であれば、2000年代はいかなる種類の怒りが問題とされているのか、あるいはかつての怒りは未解決のまま姿を変え、多様化しているのではないかといった立場から、現代の4人の作家の小説を考察したご発表で、アンヌ・エベールを研究する者としては大変興味深いものだった。

これに続いて私が「アンヌ・エベールの〈釣り竿〉におけるおとぎ話の世界」(L'imaginaire du conte dans « La Canne à pêche » d'Anne Hébert) と題して、1950年代に書かれた未完作品「釣り竿」において、作者がどのようにおとぎ話形式を用いながらケベック・アイデンティティの認識問題を概念化しているのかを、具体的なテキスト分析を通して考察した。コメンテータを務めてくださった崇実大学の LEE Ka Ya 先生はエベール研究に明るく、発表内容に関して説明不足の箇所や、掘り下げるべきテーマなどを的確に指摘してくださったため、質疑応答を通して議論を深めることができた。

その後、仁荷大学の BAE Jin Ah 先生によるご発表「主体のモデル化を用いた北米のケベック文学研究の動向分析」(Analyse des tendances de la recherche de la littérature québécoise en Amérique du Nord à l'aide de la modélisation de sujets) では、機械学習アルゴリズム (LDA) を用いながら、2000年から2020年にかけて出版された421の文系学術雑誌にあらわれる様々な文章がど

ういうトピックで構成されているかを調べた豊富なデータ分析結果が報告された。韓国語での発表だったため、私の理解は配布資料に全面的に依存している。

最後に、成均館大学の NOH Ran 先生が「生き残るために物語る：クリスチャン・ゲ＝ポリカンの小説における語り部」(Raconter pour survivre : le conteur dans les romans de Christian Guay-Poliquin) と題した発表を行われた。これは、私が現在関心を抱いている民話研究ともつながるものであったため詳しく拝聴したかったが、残念ながら発表も配布資料も地の文は韓国語であった。ただ、時々引用されるフランス語テキストから、「物語る」という人間的な行為と現代ケベックの文学的創造が密接に関係している様子を感じることができた。

この度オンラインでの参加ではあったが、韓国ケベック学会には温かく迎え入れていただき、会員との交流や意見交換を通して、韓国と日本のケベック学会が築いてきた素晴らしい関係を肌で感じることもできた。今後もこの実り豊かな関係のなかで発展していくケベック研究の一端を担っていきたい。

佐々木菜緒 (白百合女子大学非常勤講師)